

近代作家研究叢書

監修／吉田精一

写生説の

江工業学院図書館
研究蔵書章

北住敏夫著

解説／藤岡武雄

日本図書センター

昭和二十八年三月三十日 初版發行
昭和三十年七月二十日 再版發行

定價 五百五十圓
地方賣價 五百六十圓

寫生說の研究



著者 北住敏夫
きた ずみ ことし を

發行者 角川源義
かく かわ げん ぎ

印刷者 山村榮
いん 刷者 やま 村 へい

東京都千代田區神田神保町一ノ三三

發行所

株式會社

角川書店
かく かわ しや くてん

東京都千代田區富士見町二ノ七

總替東京一九五二〇八番
電話九段(33)〇一一一(代表)

印刷所 株式會社同興社
製本所 株式會社鈴木製本所

序

今日寫生說といへば、繪畫に關するものとしてよりも、俳句・短歌・散文等文藝上の問題として受取られるのが普通になつてゐる。本書は文藝における寫生說について、その成立・展開の徑路を探り、文藝理論としての意義を考察したものである。

思ふに寫生ほど、久しきに亙り諸方面に及んで論議の的となつたものは珍しいであらう。明治以來の現代文藝を研究しようとする者は、これを度外視するわけに行かない。私自身の寫生說に對する關心は學生時代に由來し、昭和十年東北大學卒業に際して提出した論文に『短歌「寫生」說の研究』といふ題目を擇んだ。昭和十九年刊行の小著『日本文藝の理論』にそれを補修したものを收めて、この問題には一往のきまりをつけたつもりであつたが、終戦後ある機縁に促されて思ひ返して見ると、世上寫生論のなほ跡を絶たない實情に鑑みても、更に精細な研究をなし遂げておくことの必要が感ぜられた。それを文藝學徒としての一つの責務であるとも考へ、意を決して着手したのは昭和二十三年の春のことである。新たな用意をもつて資料を博搜し、從來未開拓であつた俳句や散文の分野にも鋤を入れながら筆を進め、二年近くを経て脱稿した。これによつて、私の三代の學究生活に一つの記念標を立てることができたのはひそかな喜びである。

本書は煩瑣なほどの夥しい引用を敢へてし、歴史的な記述に比較的多くの頁を費したが、それは寫生說その

ものをできるだけ詳しくかつ客觀的に傳へようとする意圖に基づく。無論萬全は保し得ないけれども、寫生に關する主要な言説はほぼ網羅してゐるかと思ふ。（引用の文獻は、全集もしくは單行本に收められてゐるものは原則としてそれにより、初出の個所にもとの發表年次を示した。）全體的な見とほしの下に、綿密な解釋と批評をも加へてゐるはずであつて、本書の力點はむしろそこにおかれてゐる。大體の論旨は、序説及び最後の第五章のみによつても汲み取られるであらう。

寫生説が實作とどのやうに關係するかといふ問題は本書の範圍外に屬し、向後の研究を期してゐる。しかし今まで發表した論文の中にも若干それに觸れるものがあり、卷末に掲げた目録を参照願ひたい。目下明治以降の文藝理論を包括的に研究してゐるので、寫生説に關しても新しい視野の開けて來ることが豫想せられる。

本書が刊行の運びとなつたのは、このやうな問題に深い理解のある角川源義氏の厚意によるものである。資料調査の上では、一々の記名は略させていただが、公私の圖書館や諸家の藏書から多大の恩恵を蒙つた。ここに謝意を表する。學生時代以來の岡崎義惠先生の御指導、及び阿部次郎先生の御高情に對しても感謝の念を新たにす。卒業論文の審査には岡崎先生と共に阿部先生をも煩はし、本書中では行論上しばしば阿部先生の思想に言を及ぼした。さういふ特別の因縁をもつて、この小著を阿部先生に捧呈したいと思ふ。

昭和二十七年九月

北 住 敏 夫

目次

序説 寫生説の概観

- 一 文藝理論としての寫生説(三)——畫法としての寫生と文藝上の寫實意識(四)——子規の寫實・寫生説(五)
- 二 碧梧桐と虚子、節と左千夫の説(七)——俳句の新傾向と自然主義(八)——寫生文・小説における寫生説(九)
- 三 寫生説の新方向(一〇)——ホトトギス派・アララギ派による寫生説の確立(二)——虚子の客觀寫生説(三)——赤彦・茂吉の生命主義(三)——寫生における目的意識(四)——私小説・心境小説と寫生(六)
- 四 虚子の花鳥諷詠の説(七)——茂吉寫生説の主觀的傾向(八)——リアリズムとしての寫生主義(一八)

第一章 寫生説の成立

第一 寫生説の背景と基盤

- 一 子規の寫生説の由來(三)——子規の見た繪畫上の寫生(三)——洋畫家の示唆(三)
- 二 オランダ系繪畫の寫生(五)——フォンタネージの寫生教授(七)——フェノロサ・

二
三

天心の説(三六)——外山正一・林忠正等の説(三九)——鷗外の説(四〇)——鷗外と子規(三一)——歐化・國粹の二潮流と寫生(三三)——洋畫の新舊兩派と子規(三三)

三 子規の見た文藝上の寫實(三四)——逍遙・二葉亭と子規(三五)——『維氏美學』のレアリズム論(三六)——逍遙の摸寫説(三七)——二葉亭の摸寫説(三八)——寫實主義に對する子規の態度(三九)——子規の露伴への傾倒(四〇)——子規の自然愛好(四三)

第二 正岡子規の寫生説

一 新俳句の道標としての寫實・寫生(四二)——寫實・寫生の思想の成熟(四四)——寫實から寫生へ(四六)——短歌に及ぼされた寫實・寫生(四七)——散文における寫實・寫生(四七)

二 『病牀六尺』に見える寫生説(四七)——手段としての寫生(四八)——自然を對象とすること(四九)——寫生と寫實との相違(五〇)——寫實・寫生と理想との關係(五一)——寫生の立場の相對性(五四)

三 ありのままを寫す(五四)——客觀的(五五)——具象的(五六)——印象明瞭(五七)——繪畫的技法(五七)——取捨選擇(五八)——精密な描寫(五九)

四 從來の寫實説と子規の寫生説(五九)——小説における寫實的風潮(六〇)——逍遙・蘆花・藤村等の寫生(六一)——天外と子規(六二)——三重吉の説(六三)——散文における寫實主義の推進力(六三)——俳句・短歌における革新的意義(六三)——柴舟等の絛景詩の運動(六四)

五 自然美の享受(六五)——眞よりも感覺的美感(六六)——造化の意識(六六)——配合の

意義(六七)——山の意義(六九)——寫生の美的效果(七〇)——平淡の味(七一)

第二章 寫生說の展開 上 明治時代

七三

第一 碧梧桐と虚子の寫生說

七五

- 一 碧梧桐・虚子の寫生への徑路(七五)——碧梧桐の寫實的傾向と虚子の理想的傾向(七六)——虚子における寫生と題詠との並立(七七)——碧梧桐の寫生重視(七八)——碧梧桐と虚子との對立(七九)——碧梧桐の寫生強調(八〇)——碧梧桐の寫生への反省(八二)——現實的經驗(八三)——對象としての自然(八四)——人事趣味(八五)——ありのままの表現(八五)——客觀的表現(八六)——寫生と調子(八八)——觀照的態度(八九)——想化と中心點の把握(九〇)

- 三 美的趣味的傾向(九二)——新生面の開拓(九三)——空想趣味(九四)——自然における美的世界(九五)

- 四 虚子の寫生文への轉向(九五)——碧梧桐の俳壇支配と新傾向(九六)——虚子の寫生文論(九六)——四方太・三重吉の説(九七)——漱石の説(九七)——寫生派と自然派との拮抗(九八)——自然主義者の寫生批判(九九)——寫生派の應酬(一〇〇)——漱石の餘裕のある小説の論(一〇一)——泡鳴・天溪・抱月の説(一〇三)——寫生主義と自然主義との契合(一〇四)

- 五 鳴雪の俳趣味の説(一〇四)——碧梧桐の自然主義との交渉(一〇五)——乙字の新傾向論(一〇五)——碧梧桐の新傾向と寫生(一〇六)——印象派的自然主義との類似(一〇八)——生

活的社會的(二〇九)——寫生說の消極化(二二)

第二 長塚節の寫生說

一一一

——併せて伊藤左千夫の異說につれて——

一 左千夫と節との對立(二二)——左千夫の寫實說(二三)——節の寫生提唱(二四)——左千夫の論難(二五)

二 節の寫生說の由來(二六)——自然との接觸(二六)——左千夫の人生への關心(二七)——寫生と萬葉(二八)——俳句趣味(二九)——左千夫の寫生否認(二九)——客觀趣味(三〇)——左千夫の調子重視(三一)——明瞭精細な表現(三三)——寫生の方便的意義(三五)——平淡・清楚の趣味(三五)

三 節の寫生に對する反省(三七)——主觀の尊重(三七)——左千夫の寫生推重(三八)——左千夫の叫びの說(三九)

四 節と左千夫の寫生文論(四〇)——寫生文の表現と自然主義の描寫(四一)——節の自然愛好(四三)——左千夫の寫生文趣味(四三)——漱石の『土』批評(四四)

第三章 寫生說の展開 中 大正以降

一二七

第一 ホトトギス派の寫生說 一

一三九

——大正における虛子の說を中心として——

一 大正初期の俳壇(三九)——碧梧桐の寫生を超える立場(四〇)——虛子の寫生說の變化

(一四〇)——主觀的傾向(一四三)——乙字の寫生說(一四四)——井泉水の寫生說(一四五)

二 虛子の客觀寫生の提唱(一四五)——『ホトトギス』における寫生論議(一四六)——碧梧桐・井泉水からの批判(一四七)——乙字・亜浪の寫意說(一四八)

三 客觀寫生における對象の客觀性(一四九)——客觀描寫(一五〇)——客觀的態度(一五一)——精密な寫生と調子との不調和(一五三)——乙字・井泉水の批判(一五三)——演人等と虛子との論争(一五四)——客觀寫生における主觀の意味(一五五)——善巧方便としての寫生(一五七)

四 手段としての寫生と目的としての寫生(一五八)——眞實・本體・生を寫すといふ說(一五九)——主觀・人間を主とする立場(一六〇)——ヒューマニズムとの交渉(一六一)——虛子の自然への歸依(一二三)——柳緑花紅(一六三)——禪的心法(一六三)——平凡の境地(一六五)——平明の美(一六六)

第二 ホトトギス派の寫生說 二

——昭和における虛子の說を中心として——

一 虛子の主な言說(一二七)——ホトトギス派諸俳人の寫生說(一六六)——碧梧桐・井泉水の說(一六九)

二 技としての寫生(一二九)——花鳥諷詠の說(一七〇)——客觀的具體的表現(一七三)——虛子と茂吉との對立(一七三)——青峰・誓子・秋櫻子・素十の說(一七三)——寫生と花鳥諷詠との關係(一七五)——客觀的態度と主觀のはたらき(一七六)——『ホトトギス』の主觀的傾向(一七七)——虛子の主觀的性質(一七八)——寫生主義の超克(一七九)——感情と客觀寫

生との合一（一七九）——心の躍動（一八〇）——誓子・秋櫻子の客観寫生批判（一八一）——燃焼と省略法（一八二）——眞の問題（一八三）——創造のはたらき（一八四）——誓子の寫生構成の説（一八五）

三 寫生の目的（一八六）——眞・生命の把握（一八六）——造化の力の感得（一八七）——花鳥諷詠の精神（一八八）——自然隨順（一八九）——人間主義的立場との對立（一九〇）——佛教的意味（一九〇）

四 大正における虚子の寫生文論（一九一）——客觀的事實の尊重（一九二）——文壇における寫生説（一九三）——私小説・心境小説と寫生（一九四）——久米正雄・志賀直哉・瀧井孝作等の説（一九四）——ホトトギス派の見解（一九五）——昭和における虚子の俳文論（一九六）

第四章 寫生説の展開 下 大正以降

第一 アララギ派の寫生説 一

——島木赤彦の説を中心として——

一 明治末期以來の歌壇（一九九）——赤彦寫生説の成立過程（二〇〇）——百穂からの感化（二〇三）——文明の寫生説（二〇四）——赤彦と水穂との論争（二〇四）——茂吉寫生説の成立（二〇五）——歌壇における寫生論議（二〇六）——アララギ派における寫生説の成熟（二〇七）——水穂・信綱・白秋・牧水・比露思・東聲からの批判（二〇八）——赤彦寫生説の完成（二一〇）——百穂・恒友の説（二一一）

一九

一九九

二 赤彦の立言(三二)——具體的事象との接觸(三三)——概念歌(三三)——自然と人事(三四)——對象に即する感情(三五)——觀照活動(三六)——全心集中(三七)——鍛鍊道(三八)——單純所への澄み入り(三九)

三 表現法としての寫生(三三〇)——對象と心との接觸狀態を現はす(三三〇)——具體的客觀的(三三一)——表現の直接性(三三二)——抽象的概念的表現(三三三)——寫生の相對性(三三六)——寫生と調子(三三六)——形似の問題(三三八)——寫生の接近に過ぎるもの(三三九)——中國畫論における寫生と寫意(三四〇)——單純化(三三一)——現實的對象との關係(三三二)——象徴(三三三)

四 寫生の目的としての生命表現(三四四)——寫生と傳神・寫意(三四五)——對象の生命即自己の生命(三四六)——リップス・阿部次郎の説(三四七)——理想主義の思潮(三四九)——清新的の美(三四〇)——幽寂境(三四二)——東洋的傳統(三四三)——自然への歸入(三四四)

第二 アララギ派の寫生說 二

——齋藤茂吉の説を中心として——

一 茂吉寫生說の展開(三四四)——生のあらはれ(三四六)——生を寫す(三四七)——實相觀入(三四八)——大正における水穂等との論争(三四九)——昭和における水穂・白秋との對立(三五〇)——プロレタリア派との抗争(三五二)——現實主義の問題(三五三)——憲吉・百穂・文明の寫生說(三五三)——俳句寫生說との交渉(三五三)——萩原朔太郎・高見順の寫生批判(三五四)

二 總和・全體としての寫生(三五五)——寫生の定義(三五六)——手段・方法としての實相觀

入(二五七)——歌心・衝迫(二五七)——阿部次郎との交渉(二五九)——ディオニュソスの
(二五八)——感動と觀入(二六〇)——實相の意味(二六一)——對象の現實性(二六二)——空想・
想像の場合(二六三)——内面的必然性(二六四)——心の寫生(二六五)——實相觀入の意味
(二六六)——思想的抒情詩の問題(二六七)——觀入とふ語(二六八)——Anschauung の
はたらき(二六九)——自然隨順(二七〇)——他力主義的(二七一)——自己投入(二七二)——
Hineinschauen の面(二七三)

三 生の意味(二七四)——中國の哲學・畫論における生(二七五)——寫生と傳神(二七六)——
『聖書』における生(二七七)——人間のな生の意識(二七八)——リアリズムとしての寫生
(二七九)——生命主義(二八〇)——幽玄深祕な生(二八一)——寫生と象徴(二八二)

四 表現の問題(二八三)——ありのまま(二八四)——憲吉・文明の説(二八五)——客觀的具象的
(二八六)——客觀性の超越(二八七)——生との内的關係(二八八)——聲調と寫生(二八九)——
單純化(二九〇)——形似の問題(二九一)

第五章 寫生說の意義

第一 制作技法としての寫生

一 體系的觀察(二九二)——文藝理論としての寫生說(二九三)——内在的批評(二九四)——技法
としての寫生(二九五)——寫生における目的意識(二九六)

二 素材としての自然と人事(二九七)——詩歌論における物と心(二九八)——俳諧における詠

二九七

二九八

物(三三九)——自然・物の重視(三八)——心を寫す場合(三三九)——客觀主義(三三〇)——現實的と空想的(三二)——空想・想像の問題(三三)——現實性の尊重(三三)——想像の意義(三四)

三 感情の性質(三五)——對象に従ふ感情(三六)——抒情性の限定(三七)——感情の主觀的發動(三七)

四 客觀的態度(三九)——超脫的(三三〇)——主觀と客觀との合一(三三)——芭蕉・爲兼の説(三三)——觀照的態度(三三)——アポロ的とディオニュソスの(三四)

五 ありのままの表現(三六)——爲兼・眞淵・鬼貫の説(三七)——寫實的方法(三八)——客觀的具象的(三八)——詩歌論における景氣・面影(三九)——直觀性の問題(三〇)——調子と寫生(三二)——精密な描寫(三四)——取捨選擇(三五)——單純化(三六)——形似の問題(三七)——創造のはたらき(三八)

第二 寫生主義の立場……………三四〇

一 寫生主義(三四)——リアリズム(三四)——浪漫的傾向(三四)——感覺的印象的(三四)——超脫的(三五)——自然への親愛(三一)

二 眞の問題(三八)——美的意慾(四九)——平淡・清新の美(三〇)——洒落な情趣(五一)——理想性(五三)——目的意識(五四)——理想主義的風潮(五五)——自然本位(五六)——生命表現(三七)——象徵と寫意(三八)——自然への歸依・隨順(五九)——自力的と他力的(六一)

四 柳綠花紅(三六)——私小説・心境小説との類似(三三)——平凡・平明の境地(三四)——

——造化に迫る（三六五）——幽寂境（三六六）——幽玄・深祕（三六七）——東洋の性格（三八〇）

本書に著者論文目録
關係ある

三六九

序説
寫生説の概観

